

誰にも見つけられない星、あなたへ

何よりも清潔なためらい、あなたへ

こんにちは。

こんにちは。また手紙を書いてしまいました。

わたしは今あなたのことを考えながら氷を砕いています。あなたは今何について考えているのでしょうか。

突然だけど、あなたがピアノじゃなくてほんとうによかったなと思うのです。もしあなたにたくさん鍵盤があつて、触れるとぼろぼろ声をこぼしたなら、その音を

夏は視界中すべてのものが光を十分に帯びていてうれしいけど、とても疲れる季節でもあります。はぐれてしまった雲も、伸びっぱなしの庭草も、食べかけのチョコ

聴いた人たちは列をなして順番に崖から飛び降りていくことでしょう。もちろん先頭はわたしです。

レートも、干からびたミミズの死骸も、ぜんぶぜんぶあなたに見えてしまつて、あなたに会えたよろこびと不意

でも気分が悪くなるほどまつすぐです。そういう事実を丸ごと包んで楽器は鳴るのです。

水面

あなたと出会つてしまった緊張で冬の二倍の酸素がないと体が持ちません。だから野菜をたくさん食べます。

あなたがいる方角へ向けてお祈りをしたいのだけれど、どちらにいいのか分からないのでぐるぐると回りながら全方位に歌をまき散らしています。

暑い日に食べる青い野菜は愛みたいな味がします。まな板に傷がついていくのがおもしろくて時々包丁をにぎつ

きっかけはどんなものでも構わないから、あなたがわたしの影を思い出してくれるととてもうれしいです。それが短い鉛筆とか古い鏡とか半端な布切れだったりする

てみたりもするんです。食事を摂らないと生きてゆけない人間という生き物は

ともつとうれしいです。それでは、あなたの見る夢がなるべく多くの船着き場に繋がっていますように。

ほんとうに不便ですね。いつか少しの花弁だけで寝起きを繰り返せるいきものになればと毎日考えます。

それでは、あなたの眠れない夜がみんなうすずみ色の馬になつて駆けてゆきますように。

馬になつて駆けてゆきますように。

馬になつて駆けてゆきますように。

つまりあなたへ

馬になつて駆けてゆきますように。

馬になつて駆けてゆきますように。

パズルみたいにほじける絵画、あなたへ

何の片割れでもない果実、あなたへ

休符に棲む涙、あなたへ

こんばんは。

こんにちは。

こんにちは。

新月の夜は暗過ぎて、すべての通りがあなたのもとへ
続く一本道に見えてしまいます。あなたはいつだって光
の下にいるのだからおかしな話ですよ。

先日はじめて光が生まれるところを見ました。
以前からうちの庭によく遊びに来る犬がいて、晴れた
日の午後はその犬が遊びまわるのを見ているのが習慣に
なっていました。小さな白い犬です。どこからか持って
きた縄切れをぼろぼろになるまで啜えて跳ねていました。

あなたを思い浮かべた時、その背中はいつも昼の中に
いるのであいさつはいつもこんにちはでいいと思ってし
まっています。

あなたに会えなくなつてから、朝日が昇つた回数より
も日が落ちた回数の方が多いような気がします。

ある日、その子が庭をぐるぐると走り回り始めました。
いつもそうやって一匹だけで遊んでいたからはじめは何
気なく見守っていました。でももう目が回つてしまっ
たろうというくらいになつてもやめないのです。そしてど
んどん速くなつていきます。白い犬が転がるように駆け

私の想像の中に暮らすあなたは色々な場所にいるけれ
ど、たいてい真上から陽光を浴びています。昼下がりの
外階段をのぼつていくあなた。大きなガラス戸にもたれ

すこし先に見えるちいさな灯りを頼りに歩いていたは
ずなのに、気付けば湖の底にいるような気分です。
早く肺いっぱい空気を吸い込みたいのに、水底を蹴ろ
うにも脚にうまく力が入りません。だって水のなかは匂
いがしないから。

いつもそうやって一匹だけで遊んでいたからはじめは何
気なく見守っていました。でももう目が回つてしまっ
たろうというくらいになつてもやめないのです。そしてど
んどん速くなつていきます。白い犬が転がるように駆け
て、駆けて駆けて。そうしたら白い犬は白い光になつて
いました。

かかるあなた。看板の無い店の前を通り過ぎるあなた。
いつの間にか私の中のあなたが断片の連続になつて感
触を失つてしまうことがこわいです。それともはじめか
ら触れられていなかったのでしょうか。

あなたは地面の上に立っていますか。わたしはいつか
あなたが翼を持つてしまうのじゃないかと心配してるの
です。きつときれいだから。うつくしい羽のいきものは
すぐ死んでしまいます。ふくろうも蜂も天使もです。あ
なたはその仲間にならないでください。

あなたは今どんな形をしていますか。光になつてはい
ませんか。足下ばかりを見て歩く癖は治りましたか。冬
の星座は今でも嫌いですか。また手紙を書きますか。

ひっきりなしに電車の来る駅舎でわたしがずっと
帽子を編んでいます。もうとづくに完成しているし、い
つまでたつても完成しません。乗るべき電車は来ないか
らです。あなたのいる場所には時計がありますか。あな
たはそれを見ることが出来ますか。

それでは。あなたをさみしくさせる香りの花がぜんぶ
枯れてしまいますように。

それでは。あなたの暮らす季節にいつだって名前があ
りませんように。

それでは。あなたの瞼に触る木枯らしが遠くの国から
吹くものでありますように。

旅人を帰す森、あなたへ

音もなく燃える手記、あなたへ

こんにちは。

こんにちは。

今日は一日中窓の外を眺めていました。あなたの見る窓の外の景色は動いていますか。それとも止まっていますか。進行方向とは逆に手繰り寄せられていく景色がある。あなたの頬を撫でる音は問いかけとお祈りのどちらに近いですか。

私、もうずっとあなたに言われたことをきちんと守っています。

鏡を見ない。

自分の声を忘れない。

近くではなく遠くを見る。

動かないものより動くもの。

眠るよりも先に目を閉じる。

あなたよりもあなたみたいなのは他にいないから安心してあなたの森を守ってください。誰も迷い込めない森を。

それでは。あなたを一人にさせる川が絶えず透き通っていますように。

遠くからサイレンが聞こえて、近づいたり離れたりを繰り返し、どンドン音は上へ上へ登ります。目に見えないのに居場所が分かるのは、会えない人を抱きしめてみるみたいな感覚がします。

あなたに触れられなくても、あなたの姿が見えなくても、あなたの声だけでも聞こえる場所があるのであれば知りたいと思っています。

生きてきた、というよりもずっと命拾いしてきたのかもしれない。過不足のない意味を見つけることができないから今でもあなたの灰を読んでいます。

古い薬局の入り口が私が名前を付けた花で埋もれていて入れません。私はどうしてもその青い花の名を思い出せません。つまらないものにまでたくさん名前を付けたからでしょうか。思い出せないから入れないのかもしれない。

それでは。あなたもあの花の名前を一度と思い出せませんように。